

第1回（平成20年）海洋立国推進功労者表彰 受賞者リスト

1. 「海洋立国日本の推進に関する特別な功績」分野

部門	氏名・名称	年齢	所属等	功績事項
普及啓発	京都府立 かいようこうとうがっこう 海洋高等学校	-	京都府	【総合的な海洋教育】 平成2年に全国に先駆けて学校名に「海洋」を取り入れ、平成15年には海洋科学科、海洋工学科、海洋資源科に学科改編をし、新しい海の時代の「海洋教育」としての性格を強くした。特に海洋科学科は水産・海洋系の専門高校として初めての進学系学科であり、上級学校への進学及び将来の海洋スペシャリスト育成など、幅広い進路を実現させた。
普及啓発	栗林 忠男	71	慶應義塾大学 名誉教授	【総合的な海洋政策に関する提言】 昭和50年代後半から、海洋に関する総合的な政策枠組の必要性を提言。平成14年以降は、海洋基本法に関する主要な検討組織にとりまとめ役として参画し、平成19年の海洋基本法成立に貢献。同法成立後は、総合海洋政策本部参与会議座長として、海洋基本計画策定に当たり助言。
普及啓発	こもり 陽一	41	作家	【海洋に関する創作活動】 「海猿」、「トッキュー!!」、「我が名は海師」等の漫画やそのテレビ化・映画化を通じ、これまでほとんど注目されることのなかった海の安全や治安の問題、さらにはこれに関わる官民の関係者の取組みに関する国民の意識喚起・理解増進に大きく貢献。
普及啓発	湯原 哲夫	64	東京大学 海洋技術フォーラム	【海洋技術政策に関する提言】 平成17年に「海洋産業立国」の思想の普及を目指し、産学官の海洋関連機関からなる「海洋技術フォーラム」を結成し、同フォーラムの代表となる。以降、同フォーラムの活動を通じ、新海洋産業創出のための研究開発課題、人材育成の必要性等について、第3期科学技術基本計画、海洋基本法、海洋基本計画等、我が国の海洋関連の政策策定に対して提言を行う。

2. 「海洋に関する顕著な功績」分野

部門	候補者名	年齢	所属等	功績事項
科学技術振興	青木 太郎	61	(独)海洋研究開発機構 海洋工学センター 先端技術研究プログラム プログラムディレクター	【海洋探査技術の開発】 日本で初めての本格的な大型水中無人探査機「ドルフィン3K」（3,000m級）及び世界最深部マリアナ海域の海底に到達した「かいこう」（11,000m級）を開発し、「ナホトカ号」調査、「対馬丸」「H-IIロケット8号機」調査に大きく貢献を果たした。また、自律型巡航探査機「うらしま」（3,500m級）を開発し、平成17年には距離317kmを連続航走し世界記録を樹立した。
水産振興	象潟水産学級	-	秋田県漁業協同組合	【水産資源の増殖】 かつて2万トン近くあったハタハタ漁獲量が72トンまで激減したため、漁業者が自ら資源管理等に取組みハタハタ資源を着実に増加させてきた。特にその中でも本会は現場に根ざした独自の工夫により、古網等を利用したハタハタの産卵場造成など、水産業の振興に大きく寄与している。
海事	南崎 邦夫	80	(株)コンプローテック 代表取締役社長	【造船の技術開発】 昭和41年に世界初の20万トン級タンカー「出光丸」の建造に大きな役割を果たしたほか、純国産技術による新たなLNG船を開発するなど、我が国の船舶建造技術の向上に先駆的な役割を果たした。
自然環境保全	内田 至	75	名古屋港水族館館長	【ウミガメの保護】 昭和30年代からアカウミガメの研究を進め保護のための基礎を築くとともに、具体的な保護活動に対しても国交省・水産庁等の行政や民間保護団体への貢献を含め、多大な実績を持つ。さらに、水族館館長としても、ウミガメだけでなく海棲哺乳類の飼育繁殖についての先進的取組実績がある。

第2回（平成21年）海洋立国推進功労者表彰 受賞者リスト

1. 「海洋立国日本の推進に関する特別な功績」分野

部門	氏名・名称	年齢	所属等	功績事項
普及啓発	あきやま すすひろ 秋山 昌廣	68	(財)シップ・アンド・オーシャン財団 会長	【総合的な海洋政策に関する諸活動】 平成13年に(財)シップ・アンド・オーシャン財団会長に就任。同財団内に「海洋政策研究所」を設置し、広く海洋政策全般に関する研究活動を主導。海洋基本法制定に尽力されるとともに、最近では「ソマリア沖海賊対策緊急会議」において議長を務め、海賊行為への対応の必要性を訴えるなどの取り組みが、「海賊対処法」制定への動きや海上自衛隊による護衛活動の実現に繋がるなど、我が国の海賊対策に貢献。
普及啓発	うちだ すすむ 内田 詮三	73	沖縄美ら海水族館館長	【水族館における展示・解説活動】 海棲哺乳類の調査研究において先駆的な実績を挙げたほか、海洋環境・生物に関する環境教育活動に長年積極的に取り組み、特に、美ら海水族館における展示の工夫や解説活動は高く評価されており、昭和56年の館長就任当初70万人程度であった入館者数を300万人余りに増やすなど、沖縄の海洋・サンゴ礁生態系の重要性の全国的な普及啓発に貢献。
普及啓発	ひらぶねがわりつ 兵庫県立 かすみがらことうがっこう 香住高等学校	-	兵庫県	【総合的な海洋環境教育】 学校保有の大型実習船で日本周辺海域における漁獲採取調査を行い、我が国の漁業資源の維持や管理に貢献。特に、世界初の水深2000mでの桁網トロールは深海における漁業資源量の調査、評価を可能とし、日本の食糧確保につながっている。ほかにも兵庫県豊岡市が取り組む「コウナリと共生した環境づくり」に参画するなど、海洋と共生した持続可能な環境作りに貢献。
科学技術	なはい すすけい 平 啓介	67	琉球大学理事	【深海における観測技術の開発】 極めて高い水圧のため、これまでの観測機器では深海底での精度の高い観測ができなかった。そこで水深10000m以上あるマリアナ海溝での温度、塩分、流速を測定するための耐圧性の優れた機器を開発し、1992年に温度と塩分、1995年に流速の測定に成功。また答申「21世紀初頭における日本の海洋政策」の取りまとめに尽力するなど、「海洋基本法」制定にも貢献。

2. 「海洋に関する顕著な功績」分野

部門	候補者名	年齢	所属等	功績事項
科学技術振興	おき たいけん 沖 大幹	44	東京大学 生産技術研究所教授	【海洋及び陸域の水循環に関する研究】 過去の水循環モデルではダム貯水池、灌漑など人間活動による水循環に対する影響は過小評価されていたが、これを考慮した新しいモデルを開発することで、人間の経済活動が地球の大気、海洋、陸域の水循環に与える影響を明らかにした。このモデルを利用することで、将来の人口や経済活動の推定値をもとに、グローバルな水の分布がどのように変遷していくか、向こう100年という長期間に渡るシミュレーションデータを構築できた。
水産振興	ながさきしりつ 長崎市立 のもしょうがっこう 野母小学校		長崎市	【多年にわたる漁場環境の保全】 平成元年に児童の自発的な取組によるゴミ拾いが行われたことをきっかけに、学校の環境美化活動としてゴミを拾いながら登校する「ゴミフ運動」を開始。活動が学校近くの海岸へと展開されるとともに、保護者や地域住民をも巻き込み、現在まで20年もの間漁場環境の保全に貢献。子どもたちの活動は、地元の人々を知ることに由来する水産業への理解の増進だけでなく、ふるさとの海を守っていくようとする市民意識の醸成にも貢献。
海事	てらにし いさむ 寺西 勇	59	(株)三和ドック 代表取締役社長	【造船技能伝承の枠組の創設】 造船技術の伝承、熟練技術者の育成を目指し、広島県尾道市に日本で初めての造船事業者による造船技能センター「因島技術センター」を立ち上げ、その運営に尽力。同センターの成功は、「因島モデル」として全国展開のモデルとなる。その後、日本初の「造船技能開発センター」が設置され、その運営委員長として、全国6ヶ所の地域技術センターの立ち上げに尽力するなど、日本の造船業における若年人材への高度な造船技術の伝承に貢献。
自然環境保全	しみず まこと 清水 誠	73	東京大学名誉教授	【海洋の環境に関する研究・調査】 水産資源及び海洋生態学の専門家として、長年にわたり東京湾の環境と生物の変遷等に関する研究調査を続ける傍ら、中央環境審議会をはじめとする多数の委員会等に参画し、方針等のとりまとめを主導するとともに、自然環境保全基礎調査や国立・国定公園総点検事業、環境アセスメント制度の構築に協力するなど、海域生態系の保全に関連する分野について、その草創期から行政施策の推進に貢献。

第3回（平成22年）海洋立国推進功労者表彰 受賞者リスト

1. 「海洋立国日本の推進に関する特別な功績」分野

部門	氏名・名称	年齢	所属等	功績事項
普及啓発	いしはら じかす 石原 義剛	72	海の博物館館長	【海洋に関する文化財の収蔵・展示】 三重県鳥羽市にある「海の博物館」を昭和46年から二代にわたり私財を投じて運営している。当博物館は国指定重要有形民俗文化財6,897点を含む約58,000点を展示する日本一の規模を誇る博物館として、「海」と「人間」との深い関わりを伝えている。また、海の博物館の展示だけにとどまらず、積極的に講演や海の問題にも力を入れている。
普及啓発	しずおかけんりつ 静岡県立 やいづ すいさんこうとう がっこう 焼津水産高等学校	—	静岡県	【総合的な海洋教育】 永年にわたり漁業および水産加工分野を中心に水産教育を推進し、その間多くの水産関連人材を輩出した。あわせて、地域に根ざした商品の開発等でも地元の活性化に大きく貢献した。また、実習船「やいづ」は、海上保安庁へのデータ提供、国際プロジェクトであるアルゴ計画への参画など、地域を越えた貢献もしている。
科学技術	うえはら はるお 上原 春男	70	元佐賀大学長	【海洋温度差発電に関する研究】 長年にわたり「海洋温度差発電」についての研究に従事し、今後の実用化に資する今までにない高効率なシステムを発明した。また、水の淡水化や水素製造に、この技術を活用する仕組みについても研究を推進した。さらに、国連本部で、海洋温度差発電についての講演を行うなど、長年に渡り研究だけではなく技術普及や啓蒙活動にも従事した。
地域振興	いしだ はじめ 石田 啓	63	金沢大学理工研究域環境デザイン学系教授	【工学的知見を用いた景観保全】 「寄り回り波災害」において軽減効果を発揮した富山湾の新型有脚式離岸堤の建設指導や日本三大松原の一つである気比松原の優れた景観を損なうことなく養浜を成功させ観光客の増加に寄与する等、30年以上に亘り、海岸工学や流体力学の学術知見を基に、北陸沿岸全体の海岸や港湾の計画・保全に努め、種々の問題解決を図った。

2. 「海洋に関する顕著な功績」分野

部門	候補者名	年齢	所属等	功績事項
科学技術振興	たかはし けいじ 高橋 孝三	62	九州大学大学院教授	【海洋における気候変動研究】 厳しい気象環境のため、過去にほとんど行われなかった北極域における海洋調査を国際プロジェクトとして推進し、海洋による二酸化炭素の吸収・放出、生物による炭素の固定化など地球温暖化について理解を深める上で重要な極域での炭素循環の解明に貢献。5000万年前の温暖な時代の北極海の様子を明らかにするなど成果をあげた。
水産振興	ちかぎ たいせいのぶ 近畿大学水産研究所	—	学校法人近畿大学	【クロマグロの完全養殖と量産化】 近畿大学水産研究所では、2002年に世界で初めてクロマグロの完全養殖を達成した。その後も生残率の向上など産業化を目指した研究を続けた結果、完全養殖クロマグロ幼魚の養殖用種苗の生産尾数が2009年には約4万尾に拡大した。クロマグロをめぐる国際的な資源問題の解決策を提示した。
海事	なかむら たくあき 中村 庸夫	60	海洋写真家	【海洋に関する芸術活動】 海洋写真家の第一人者として、帆船や客船の写真のみならず、海洋生物、海の食材等の写真を通じ、日本の海洋文化を諸外国に紹介した。また、世界各国の船を日本において紹介し、双方の海事思想の普及に寄与した。

※「自然環境保全」部門については該当者なし。

第4回（平成23年） 海洋立国推進功労者表彰 受賞者リスト

1. 「海洋立国日本の推進に関する特別な功績」分野

部門	氏名・名称	年齢	所属	功績事項
普及啓発	堀江 謙一 ほりえ けんいち	72	海洋冒険家	【海洋冒険の経験を活かした海事思想の普及啓発】 1962年(昭和37年)にヨットで世界初単独太平洋横断に成功したのを皮切りに数々の世界一周や単独太平洋横断に成功、海洋冒険家の先駆者として日本のみならず世界においても活躍。長年にわたり氏は海洋冒険による経験や知識を活かした様々な活動を通じて世代を問わず広く国民一般に海の魅力を発信しており、海事思想の普及に多大な貢献をしている。
科学技術	小池 薫夫 こいけ いくみ	67	琉球大学監事	【海洋物質循環の先駆的研究】 海洋における多くの先駆的な物質循環研究を通じ、沿岸環境保全の基礎となる科学的な知見の整備に貢献するとともに、地球温暖化をはじめとするグローバルな環境問題と海洋の関わりについての理解の深化に貢献した。地球圏・生物圏国際共同研究計画(IGBP)や日本学術会議、総合科学技術会議等の要職を歴任し、国内外の地球環境研究の推進にも精力を注いだ。
地域振興	岩手県立 宮古水産高等学校 いわてけんりつ みやこみずさんこうとうがっこう	—	岩手県	【地域に密着した水産教育・産業の活性化】 全国最初の水産専門の中等教育学校として創設され、多年に渡り水産教育への取り組みを続けてきた。かつては産業廃棄物となっていた、地場の未利用資源(スジメ、サケの中骨等)にいち早く着目し、商品化に成功。また、自治体や地元企業と積極的に協力し、地域産業の活性化にも貢献した。東日本大震災では被災したが、地域復興に向けた活動にも精力的に取り組んでいる。
地域振興	瀬戸内国際芸術祭 実行委員会 せとうちうこくこいげいじゆつさい じっこういんかい	—	—	【「海の復権」を目指した国際芸術祭】 古来から交通の大動脈として重要な役割を果たしてきた瀬戸内海を舞台に、そこに散在する島々の歴史や文化を活かした「海の復権」を目指す壮大なアートプロジェクトを企画、海と島を会場に行われる世界で初めての国際芸術祭を実施。瀬戸内海の魅力を世界に向け発信するとともに島々の活性化や交流人口の増加、芸術祭関連の新たな雇用を創出するなど地域の振興に貢献。今回は2013年に開催する予定。

2. 「海洋に関する顕著な功績」分野

部門	氏名・名称	年齢	所属	功績事項
科学技術振興	鈴木 敏 すずき とも	63	静岡大学教授	【海洋の炭素循環やサンゴ礁の研究】 海洋の炭素循環を解明するため、溶存有機炭素の測定法の開発・改良の研究を精力的に進めた。この成果をもとに、「サンゴ礁は貧栄養海域」という従来の定説に一石を投じる成果を上げた。さらに、サンゴの白化について新たな仮説を提唱・検証したほか、世界で初となるサンゴポリプ内部の研究手法を開発した。これらの成果はメディアでも多数報じられた。
海事	吉田 宏一郎 よしか ひとしちろう	72	東京大学名誉教授	【海洋構造物に関する研究開発】 緊張係留プラットフォーム(TLP)の波浪中応答解析手法は係留索の信頼性を確保し大深水域におけるTLPの実用化を可能とし、世界の資源・エネルギー開発等に多大な貢献。また大水深域の海洋開発の安全面の観点から世界各国の構造解析の安全性評価手法として反映。新産業創出の可能性を有する超大型浮体式構造物による海洋空間利用に関する計画・設計の研究を行うとともに、海洋工学分野の技術者の育成にも尽力。
自然環境保全	横濱 康繼 よこはま やすつぐ	76	元南三陸町自然環境活用センター所長	【海藻おしばを用いた自然環境教育活動】 海藻学の専門家として環境省自然環境保全基礎調査、環境影響評価技術検討会に積極的に関与。また、自然観察会等、地域に根ざした環境教育を精力的に推進。特に学術的にしか用いられなかった海藻さく葉標本作製を「海藻おしば」に変えたことは社会的な貢献として特筆される。

※「水産振興」部門については該当者なし。
※年齢は平成23年7月15日現在。

第5回（平成24年） 海洋立国推進功労者表彰 受賞者リスト

1. 「海洋立国日本の推進に関する特別な功績」分野

部門	氏名・名称	年齢	所属	功績事項
普及啓発	片田 敏孝 かた たか	51	群馬大学広域首都圏防災研究センター長・教授	【「釜石の奇跡」に結実した津波防災教育】 自然に対する畏敬の念を再認識し、自らの命を主体的に守る姿勢の重要性に気づかせることを主眼とし、①想定にとらわれるな、②その状況下において最善を尽くせ、③率先避難者たれ、という「避難3原則」を掲げ、釜石市において8年間にわたり継続的に津波防災教育に取り組んできた。この結果、東日本大震災の際には、釜石市の小中学校の生徒約3000人が避難行動をとり、命を守り抜いた。
普及啓発	さかなクン	—	東京海洋大学客員准教授	【お魚文化の普及啓発】 海洋政策を推進するには、国民の理解・関心を高めることがなによりも大切なものとなっている。こうした中、メディアや著作等を通じた情報発信は、子供から大人まで幅広い層の国民にお魚、水産、地球環境保全など海洋全般への関心を大いに高めることに貢献している。また、東日本大震災後は、全国漁業協同組合連合会等と協力し、募金活動を行うなど被災地を勇気づける取組にも尽力した。
普及啓発	びわ湖フローティングスクール	—	滋賀県教育委員会	【船の教育的機能を活かした宿泊体験学習】 青少年の健全な育成及び琵琶湖の環境保全を目的として、昭和58年から琵琶湖上において、学習船「うみのこ」（総トン数928トン）による、滋賀県内の全小学5年生を対象に、船ならではの宿泊体験学習を実施。地方自治体自らが船を所有し、船の教育的機能を小学校の教育課程に明確に位置付け、学校教育の一環として船内での湖上宿泊体験学習を実施していることは全国に類を見ない教育活動として注目されている。
科学技術	上 真一 かみ まこと	62	広島大学理事・副学長（平和・国際担当）	【クラゲ類の大発生に関わる研究】 近年、本邦沿岸漁業や臨海発電所の操業等に深刻な被害をもたらしているクラゲ類の大発生が沿岸生態系に対する人為的インパクトに起因することを明らかにした。特に、これまで謎であったエチゼンクラゲの発生場所、発生条件等を解明し、中国沿岸から黄海・東シナ海から日本海への幼若クラゲのモニタリングにより、クラゲ来襲予測体制を確立し、エチゼンクラゲ大発生に対する対策に貢献した。

2. 「海洋に関する顕著な功績」分野

部門	氏名・名称	年齢	所属	功績事項
科学技術振興	深澤 理郎 ふかざわ りょう	62	独立行政法人海洋研究開発機構地球環境変動領域長	【世界初の深海温暖化の実証】 海洋の高精度観測技術を確立し、観測データにより太平洋深層における海水温上昇を世界で初めて明らかにし、温暖化に伴う深層循環の変化の可能性について指摘した。さらに海洋観測の第一人者として全球海洋観測の国際的枠組の構築に貢献したほか、東日本大震災後にいち早く放射性物質の海洋モニタリング・シミュレーションを実施した海洋研究開発機構において、この業務を統括した。
水産振興	日本海北部ニシン栽培漁業推進委員会	—	—	【漁業者主体の取組による北海道ニシン資源の復活】 全国でも稀な漁業者自らが資金を出し合うなどの自主的・主体的な人工稚苗放流事業を行う継続的な取組は、明確な漁獲量の増大に結びつき、資源管理に大きく寄与した。このことで、北海道の春の風物詩を復活させ地域振興にも貢献した。当該委員会の行う仔稚魚期の分布状況調査や生物測定調査は、効果的な資源管理に資する取組で資源管理の優良事例として大いに注目されている。
海事	星野 二郎 ほしの じろう	82	三井造船㈱元社長	【造船技術の高度化による海洋技術の発展】 「かいこう」、「R2D4」等の開発・建造等、無人探査技術の高度化に努め深海開発分野で先駆的な役割を果たすとともに、TSLの開発等により高速海上輸送システムの確立に主導的な役割を果たした。その他「半潜水型海中展望船」、「FPSO」の開発・建造等により、我が国の海洋調査・開発技術の世界最高レベルに引き上げ、青少年に海洋技術についての夢を与えるとともに、造船業から海洋産業への新たな発展の礎を築いた。
自然環境保全	特定非営利活動法人黒潮実感センター	—	—	【持続可能な里海づくり】 「自然を実感する取組」、「自然を活かした暮らし作り」、「自然と人との共生」を柱に、地元事業者、地域住民や行政、大学等の様々な主体と連携し、里海を人と海が共存できる海と捉え活動している。その取組は、子どもたちの環境教育にも活用されている他、近隣の市町村にも拡大し、エコツアーリズムによる地域活性化等のテーマで全国から注目されている。

※年齢は平成24年7月13日現在。

第6回（平成25年） 海洋立国推進功労者表彰 受賞者リスト

1. 「海洋立国日本の推進に関する特別な功績」分野

部門	氏名・名称	年齢	所属	功績事項
普及啓発	公益財団法人 日本財団	—	—	【次世代に豊かな海を引き継ぐために】 海事・海洋に係る人材育成事業の推進、マラッカ・シンガポール海峡等の航行安全支援、我が国の海洋政策に関する提言、「渚の交番」プロジェクト及び「Sea Bird」プロジェクトの取り組み、造船所の人材育成などの取り組み、東日本大震災における海の復興支援事業や海洋関係事業に対する助成など幅広く活動。
科学技術	塚本 勝巳	65	東京大学大気海洋研究所	【ウナギの産卵場や浮魚の生活史の解明】 新しい解析手法の導入等により、ウナギ卵やふ化仔魚を採集することに世界で初めて成功し、最大級の謎であったウナギの産卵地点を特定した。また、これらの成果をNatureを含む600編以上の学術論文としてまとめるとともに書籍出版等の広報活動を行った。
科学技術	内藤 林	68	大阪大学	【船舶の省エネルギー化への貢献】 実海域での波浪中抵抗を効果的に低減させるためには水面近傍の船首船型が重要であることを世界に先駆けて理論的、実験的に明らかにし、波浪中抵抗を低減する船型開発により船舶の省エネルギー化に貢献した。また、実海域推進性能の計算システムの構築や複雑な波を精度よく長時間にわたり再現できる造波水槽の開発により船の性能推定の研究に貢献した。
地域振興	安部 義孝	72	アクアマリンふくしま	【水族館を通じた地域振興及び復興への貢献】 「海を通して人と地域の未来を考える」という理念のもと、地域に根ざし開かれた施設づくりに努め、ボランティアの導入を積極的に進めてきたほか、多彩かつ個性的な展示ソフトを開発し、地域振興及び魚食普及にも貢献した。東日本大震災では、わずか4ヶ月という驚愕のスピードで再オープンを果たし、地域の復興のシンボルとなった。

2. 「海洋に関する顕著な功績」分野

部門	氏名・名称	年齢	所属	功績事項
科学技術振興	国立極地研究所 海洋動物研究チーム	—	—	【海洋生物の行動・生態情報の高精度化】 小型かつ多機能な行動・環境情報記録計を海洋生物に直接とりつけて観測を行う「バイオロギング」手法を世界に先駆けて開発し、100種以上の生物について、高精度の行動・生態情報を取得することに成功した。この成果は海洋生態系に関する情報の高精度化に大きく貢献し、社会にわかりやすく発信することで、科学への関心を高めた。
水産振興	沖縄県 八重山漁業協同組合	—	—	【「島人(しまんちゅ)の宝 豊かな海を守る」】 日本最大級珊瑚礁海域を漁業者自ら海洋保護区に設定し、全国でも稀な40種以上にわたる魚類の資源管理型漁業を実践するとともに、珊瑚の天敵駆除や海底清掃に中心となって取り組み、日本有数の観光資源であり環境学習の場である珊瑚礁生態系の保全活動を推進。
海事	柳原 良平	81	—	【親しみやすい作品による海事思想の普及】 複数の海運会社から名誉船長に任命されたほか、船長協会名誉会員に推薦され、船や港を題材にした作品を多く描き、船体のカラーデザインとネーミングを担当するなど、海事思想の普及に大きく貢献した。

※「自然環境保全」部門については該当者なし。
※年齢は平成25年5月28日現在。

第7回（平成26年） 海洋立国推進功労者表彰 受賞者リスト

1. 「海洋立国日本の推進に関する特別な功績」分野

部門	氏名・名称	年齢	所属	功績事項
普及啓発	江戸っ子1号プロジェクト	-	-	【深海を身近に引き寄せた純国産探査機の開発】 下町の中小企業等が、多数の機関を巻き込み、海洋を手軽に探求できる低コスト高性能の純国産海洋探査機「江戸っ子1号」を開発。世界で初めて、水深8,000m海域における深海魚の3Dハイビジョン撮影に成功した。テレビや新聞等多くの取材や報道を通じて、国民各層の海洋への理解促進に貢献した。
普及啓発	海洋政策研究財団 (シップ・アンド・オーシャ ン財団)	-	-	【人と海洋の共生を目指した海洋政策確立への貢献】 海洋基本法研究会の事務局として、海洋基本法・海洋基本計画の制定及び改定に貢献するとともに、海洋教育の普及促進にも早くから取り組み、我が国の海洋教育発展における基盤構築に大きな役割を果たした。また、リオ+20をはじめとする国際会議に主要メンバーとして参画し、国際社会における海洋政策の確立に尽力する他、北極海航路の啓開事業や海洋に関する情報発信を積極的に行うなど、海洋政策の普及啓発に努め、幅広く活動している。
普及啓発	恒己 隆寺	62	国立科学博物館・標本 センター・コレクション ディレクター	【ダイオウイカの調査・研究を通じた深海生物に関する普及】 深海の生物・ダイオウイカの調査・研究に取り組み、2012年には人類で初めて、深海に生きるダイオウイカとの遭遇を果たす。未知の生物を捉えたその映像はドキュメンタリー番組として国内外に大きな驚きを与えた他、監修を行った特別展「深海」には3ヶ月で60万人近い来場者が訪れ、深海生物に対する国民の興味関心を高めることに貢献した。
産業振興	武井 俊文	83	(株)IHI	【わが国海洋産業の振興への貢献】 (社)経済団体連合会海洋開発推進委員会の委員長として、わが国周辺の海底資源の探掘権の拡大のために実施された大陸棚固定調査に民間側の横断的な協力体制をとりまとめ、国とともに取り組む民間出資の新会社「日本大陸棚調査(株)」の設立に道筋をつけ、産学官の連携体制の構築に尽力するなどわが国の海洋産業の振興に多大な貢献をした。

2. 「海洋に関する顕著な功績」分野

部門	氏名・名称	年齢	所属	功績事項
科学技術振興	佐野 有司	58	東京大学 大気海洋研究所	【海洋地球化学の先端的研究開発】 4種類の高感度質量分析計を駆使して、高解像度の海洋古環境復元や深部流体移動と海溝型巨大地震の発生、海洋深層循環と物質循環など海洋地球化学を中心とした様々な分野において優れた成果を生み出した。その成果は科学雑誌ネイチャーに6報、ネイチャー姉妹誌に4報、サイエンス誌に2報の論文を含む多数の英文査読付き雑誌に発表されている。
水産振興	新松浦漁業協同組合 女性部	-	-	【漁村への民泊・修学旅行誘致、魚食普及・魚料理教室の取組】 1. 都市部の修学旅行生を対象とした漁村民泊の取組により、漁家の経営安定や地域の活性化に貢献。 2. 子どもたちや保護者を対象とした親子魚料理教室等の開催により魚食普及に尽力するとともに、水産業への理解を深めることに寄与。
海事	津田 尚輝	72	-	【産学官が一体となった日本主導による戦略的国際基準策定等のための仕組みの構築】 我が国海事産業の国際競争力強化を目的として産学官が一体となった戦略的国際基準策定のための仕組みを構築し、外国船舶からの二酸化炭素排出削減にかかる国際基準等、我が国の海事分野に大きな影響を与える国際基準の策定において中心的な役割を担った。また、現在、世界の海洋資源開発プロジェクトで最も注目されているブラジルへ我が国造船業が進出するための素地を作った。
自然環境保全	板井 泰憲	63	北海道大学大学院 水産化学研究院	【海洋生物多様性保全に対する専門的助言】 専門分野であるイカ類の生態や資源変動機構に関する研究等を通じ、資源管理に有益な助言を与えた。また、知床世界自然遺産地域科学委員会委員として、遺産登録に貢献し、漁業者による自主的管理を知床の海域管理計画に位置付けるなど、漁業と海洋生態学をつなぐ視点から海洋生物多様性保全に貢献した。

※年齢は平成26年5月27日現在。